

令和5年度 齋藤清美術館 館長講座・学芸員講座

【館長講座】

■ 第1回 「歴史画の魅力」

7月15日(土) 14:00-15:30

白ユリは清らかさの象徴(シンボル)であり、それゆえマリアが清らかなままで神の子を宿す(受胎告知)の寓意を表している。ヘビは描かれた文脈によって、知恵を象徴することもあれば邪さを示唆することもある。西洋の歴史画をこうしたさまざまな約束事を踏まえて「読む」ことができれば、歴史画が面白く、魅力的なものになってくる。

■ 第2回 「紙の話」

9月2日(土) 14:00-15:30

江戸時代が始まったばかりのころに、ヨーロッパ美術の巨匠を強くひきつけた和紙があった。パピルスは英語のペーパーの語源だが、「紙」とはまったく異なる製法でつくられた。イスラム教の発展に紙が深く関係していた…美術は言うに及ばず、文明社会の形成に紙は不可欠のものであった。紙はどのように生まれ、広まったのか。紙の使用はわたしたちに何をもたらしたのか。歴史と製法を中心に、紙について概説する。

■ 第3回 「冥界の女王ペルセポネーの物語」

11月18日(土) 14:00-15:30

ゼウスとデーメーテル(豊穡をもたらす女神)の間に生まれたペルセポネーは、冥界を統べる神ハーデースに見初められてかどわかされ(ペルセポネーの略奪)、冥界の女王になった。四季の始まり、美少年アドニスをめぐるアプロディーテー(ヴィーナス)との確執、プシュケーに渡した秘密の小箱などペルセポネーにまつわる物語は古来多くの美術家を魅了し、想像力を刺激してきた。本講ではペルセポネーを主題にしたバロック時代から19世紀末までの絵画について概説する。

【学芸員講座】

■ 第1回 いつもとちがう視点で楽しむ企画展「マチエール×言葉」

6月17日(土) 14:00-15:30

がりがり、ぐねぐね、ぼそぼそ、うねうね。マチエール(材質感)に着目すれば、《会津の冬》も、猫の絵も、新たな魅力が見えてくる。開催中の春季企画展「斎藤清 マチエールの冒険」をさらに楽しむために、本講座もいつもと少し異なるアプローチで、斎藤清のイメージ世界に分け入ります。

■ 第2回 絵画の役割—絵は、ただ楽しむだけのもの？

8月12日(土) 14:00-15:30

写真や映像がない時代、歴史的イベントや大イベント、当時の人々の肖像など、記録の役割を担っていたのは絵画でした。一方、表現技術が多様化し、自由自在にイメージが生み出される現代、絵画にそうした役割を求めることは無意味なのでしょうか？ 例えば、斎藤清の会津の風景画。舞台となった場所の中には、変わってしまった、あるいはもはや失われてしまった景観が少なくありません。画家が絵にしたからこそ、永遠の命を得た風景。絵画の持つ「記録」「記憶」という側面から、斎藤作品の意義を見つめ直します。

■ 第3回 会津人士交流録—斎藤清と会津の画家たち

10月21日(土) 14:00-15:30

幼少時に北海道に移住して以来、東京・鎌倉と生まれ故郷である会津から遠く離れた地で暮らしていた斎藤清。一方で、会津との縁は切れることなく、同郷の画家たちとも様々な活動を重ね、創作の上でも大きな影響を受けました。12月23日から開催する冬季特別企画展「会津人士交流録」に先駆け、斎藤清と会津の画家たちとの交流の軌跡を紹介します。